

文部科学省「全国生涯学習ネットワークフォーラム」関連事業

第18回全国融合フォーラム in オホーツク枝幸2014 (兼) 枝幸町学社融合研修会

《事業報告書》



枝幸町マスコットキャラクター
えさっしー



「北海道教育の日」協賛事業

- 日 時 平成26年10月11日(土) 13:30 開会
10月12日(日) 12:30 閉会
- 会 場 北海道枝幸町 枝幸町中央コミュニティセンター

主催 学校と地域の融合教育研究会 (融合研)
枝幸町教育委員会

主管 全国融合フォーラム in オホーツク枝幸実行委員会

文部科学省「全国生涯学習ネットワークフォーラム」関連事業
第18回全国融合フォーラム in オホーツク枝幸2014（兼）枝幸町学社融合研修会
開催要項

- 1 目的 学校と地域が融合し、地域の特色を生かした学社融合事業の更なる進化・発展を図るため、学校教育関係者と社会教育関係者が共に集い、学校・家庭・地域が融合した子どもの健全育成、学校支援を通じた地域づくり・生涯学習に関する研修を行うものとする。
 また、異常気象や大津波・大地震などの大災害に対する意識の向上や啓発をはかり、安心安全な地域づくりに向けた機会とする。
- 2 主催 学校と地域の融合教育研究会（略称：融合研）・枝幸町教育委員会
- 3 主管 全国融合フォーラム in オホーツク枝幸実行委員会
- 4 後援 枝幸町、枝幸町青少年育成ネットワーク、北海道教育委員会、北海道社会教育委員連絡協議会、宗谷管内社会教育委員連絡協議会、北海道社会教育主事会協議会、宗谷管内社会教育主事会、北海道教育大学、北海学園大学、北海道文教大学、北星学園大学、日本教育新聞社、社団法人農山漁村文化協会、公益財団法人さわやか福祉財団、公益社団法人こども環境学会、日本市民安全学会
- 5 日時 平成26年10月11日（土）13：30 開会（13：00～受付）
 ～12日（日）12：30 閉会（予定）
 ※融合研会員の方は閉会后、26年度総会を開催します（約1時間）。
- 6 会場 枝幸町中央コミュニティセンター（枝幸郡枝幸町本町916番地 枝幸町役場のとなり）
- 7 対象 社会教育関係者、学校教育関係者、行政関係者、その他関心のある方（どなたでも参加可能）
- 8 日程

10/11	13:00	13:30	14:10	14:20	16:20	16:30	17:45	18:00
	受付	歓迎セレモニー 開会式 オリエンテーション	移動	分科会	移動 休憩	パネル ディスカッション	移動	交流会 (立食形式)
10/12	8:30	9:00	10:20	10:30	12:00			
	受付	小グループ 意見交流	移動 休憩	記念講演	全体講評 次期開催地あいさつ 閉会・解散	フォーラム閉会后、 融合研総会を行います		

9 内容 全体テーマ『今、改めて問う。地域と学校の“かるやかな融合”とは？』

【1日目】

○歓迎セレモニー 枝幸高等学校音楽部「トーンチャイム演奏」

○開会式

○オリエンテーション

○分科会

第1分科会 皆さんで支える子どもたち

- ◇コーディネーター 融合研 副会長 油谷 雅次 氏（大阪府貝塚市・貝塚市社会教育委員）
- ◇発表者
 - ・枝幸町学校支援地域本部 地域コーディネーター 宮内 智子 氏
 - 〃 〃 中村 亜弥 氏
 - ・枝幸町放課後子ども教室「遊YOU広場」 代表 村山 純子 氏
 - ・融合研 大谷 裕美子 氏
 （大阪府河内長野市・河内長野市立美加の台中学校区学校支援地域本部コーディネーター）
- ◇コメントーター 文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
 研究員 立石 慎治 氏

第2分科会 皆さんで支え育てる家庭

- ◇コーディネーター 融合研 神奈川支部長 青木 信二 氏
(神奈川県厚木市・森の里地区青健連会長・厚木市社会教育委員会議長)
- ◇発表者 ・枝幸町放課後子ども教室「うたのぼり放課後ふらっとたまり場」
代表 開地 かほる 氏
・さっぽろ子育てネットワーク 代表 河野 和枝 氏
・融合研 木村 泰子 氏(大阪市立南住吉大空小学校長)(大阪府 中辻 孝典 氏)
- ◇コメントーター 琉球大学 教育学部教授 井上 講四 氏

第3分科会 防災対策・安心して暮らせる地域づくり

- ◇コーディネーター 融合研 副会長 野澤 令照 氏(宮城県仙台市・宮城教育大学)
- ◇発表者 ・枝幸町立枝幸小学校 教頭 森 茂 氏
・融合研 熊野 雅仁 氏(和歌山県田辺市教育委員会 生涯学習係長)
" 寺本 行雄 氏(和歌山県田辺市立明洋中学校 教諭)
・融合研 熊坂 伸子 氏(岩手県普代村 前教育長)(岩手県 藤尾 智子)
- ◇コメントーター 融合研 会長 宮崎 稔 氏

第4分科会 地域のスポーツ活動と健康的なコミュニティづくり

- ◇コーディネーター 融合研 伊藤 恵造 氏(秋田大学教育文化学部スポーツ・健康教育研究室)
- ◇発表者 ・枝幸町教育委員会 参事 井上 諭一 氏
・美深町教育委員会 主事 前田 研吾 氏
・融合研 嶋村 清一 氏
(千葉県習志野市・NPO 法人習志野ベイサイドスポーツクラブ理事長)
- ◇コメントーター 融合研 副会長 岸 裕司 氏
(千葉県習志野市・秋津コミュニティ顧問・文科省コミュニティ・スクールマイスター)

○パネルディスカッション

テーマ『今、改めて問う。地域と学校の“かろやかな融合”とは?』

- ◇コーディネーター 融合研 副会長 岸 裕司 氏
(千葉県習志野市・秋津コミュニティ顧問・文科省コミュニティ・スクールマイスター)
- ◇パネラー 各分科会コーディネーター(第1分科会～第4分科会)
油谷 雅次 氏・青木 信二 氏・野澤 令照 氏・伊藤 恵造 氏

【2日目】

- 小グループ意見交流 融合研 藤尾 智子 氏(北海道東北支部長・岩手県紫波町)
融合研 菊地 剛史 氏(岩手県花巻市生涯学習課・社会教育主事)

○記念講演

演題「今こそ、学校・家庭・地域の絆を深めよう！」

- 講師 文部科学省初等中等教育局 教科調査官・生徒指導調査官 おさだ とおる
国立教育政策研究所 総括研究官・教育課程調査官 長田 徹 氏

- 全体講評 融合研 会長 宮崎 稔 氏

○次期開催地あいさつ

1. 事業風景

□歓迎セレモニー 北海道枝幸高等学校音楽部「トーンチャイム演奏」



□主催者あいさつ

学校と地域の融合教育研究会

会長 宮崎 稔 氏



□開催地あいさつ

全国融合フォーラム in オホーツク枝幸実行委員会

副実行委員長 三上 信昭 氏



□開催地歓迎あいさつ

枝幸町教育委員会

教育委員長 妻鳥 道明 氏



□分科会

◇ 第1分科会「皆さんで支える子どもたち」

コーディネーター 油谷 雅次 氏（大阪府貝塚市・貝塚市社会教育委員）



第1分科会では次の3つの事例発表がありました。

1. 宮内さん、中村さんからの報告は、地元の枝幸町学校支援地域本部 平成20年から地域コーディネーターと学校担当コーディネーターが小学校の一室（ほっとするべや）を拠点に活動を行っている学社融合の実践報告です。
2. 村山さんからの報告は、枝幸町放課後子ども教室「遊 YUO 広場」平成16年から小学校の生活科を拠点に児童と地域の大人や未就学児が参加できる学社融合の実践報告です。
3. 融合研会員 大谷さんからは、大阪府河内長野市 市立美加の台中学校 学校支援地域本部からの報告です。平成20年から始まった中学校区をエリアとして子どもの学びの場として、地域の住民のふれあい・集いの場として「つながる美加の台」をスローガンに小中一貫推進事業として学校・家庭・地域連携を深めている学社融合の実践報告です。

これら3つの発表に共通していることは

- ① 平成20年からその主体的な活動が始まって、ちょうど6年がたった活動であるということです。
- ② 学校を拠点にして学校と地域がまさしく第1分科会のテーマ「みんなで子どもを支えている」ということです。
- ③ その活動を支えている中心メンバーが地域コーディネーターで学校と地域の様々な団体やまたは一人の地域の人との間にたってそれらをつなぐ役割を担って活動していることでした。

これ以外に、それぞれの関係する点を上げれば、その背景には「学校支援地域本部」や「放課後子ども教室」という文部科学省からの推進事業に関わっていることで、それぞれ土地や場所が違って独自の活動を行っているが、やはり行政や国の施策にそったことをきっちりと把握し、活用していることは大きなバックボーンとなっているというか推進力になっています。違った言い方をすれば、自分たちの活動に、積極的に活用できるものは貪欲に利用し、アンテナを張って社会の動きを察知し、自分たちの活動や子どもをどうかしたいという人たちの強い意思がそこには見られることでした。

発表内容の特徴を個別に述べていくと
第1番目の宮内さんたちの発表内容の特徴は、学校と地域のWIN&WINの意味と学社融合が重要であるという視点を明確に地域コーディネーターの皆さんが持っていることでした。それは地域で長年にわたりしっかりと学社融合の意識を持って活動し続けていたキーマンの井上さんの存在があることも大きな一歩となったことにほかなりません。現在までこのような学社融合の活動をしている中でも自からの課題も自覚しています。それは子どもの保護者としての活動からスタートしたこの実践をこれから自らが保護者を卒業して行く過程で地域にいかにも浸透させ、学校と地域が保護者という枠を離れてお互いの良好な関係を築きあげていくかということにほかならないことです。いかに活動を継続的に運営し続けていくかというこの団体でも持っている課題です。

◇ 第2分科会「皆さんで支え育てる家庭」

コーディネーター 青木 信二 氏 (神奈川県厚木市・森の里地区青健連会長・厚木市社会教育委員会議長)

今回はフォーラム開催前からの波乱の幕開けでした。開催日二日前に入った連絡で、事例発表者のひとり、大空小学校長 木村素子さんが学校の諸事情により出席できないことがわかりました。ただちに関係者と連絡しあい、また大阪支部中辻さんの支援申し出もあり、融合フォーラムでは私の知り限り初めてのスカイプによるLIVE中継による事例発表と決まりました。これもまた、問題点やトラブルを課題と捉えて、前向きに動き出した融合研の関係者にはあらためて感謝したいと思います。

第2分科会は北海道から実践事例が二つ、全国の融合研会員から一人の発表でした。

まずは、地元枝幸町歌登から開地かおるさんより「ちいさなマチで“ふらっと”10年目」と題して、ふらっとたまり場、略して「ふらたま」の設立を通しての10年間の思いや苦労話などを聞かせていただきました。私も地域で活動しているものとして、エリアコミュニティの中で既存の組織を巻き込みながらの活動の課題など多くのことに継続の難しさと大切さに心打られました。10年もの継続は大きな力となって、開地さんの胸の中で育っていました。これは多くの方々の共感を与えたのではないのでしょうか。このような地道な活動があって、まちづくりは成り立つものと確信していますし、このつながりが豊かで多様な家庭教育への糧になるのではないかと共有できたと思います。

2つ目の発表は、大都会札幌市で実践されている河野和枝さんより「さっぽろ子育てネットワークの親育て」についての事例でした。カナダでの講演研修でヒントを得て、「子育ては一人ではできない」という認識から、子育てに悩む母親たちを中心に子育て交流会を設立して、多くの子育ての悩みに対峙し続け活動してきた活動です。親も学べねばならないという信念は、多くの方々に広まり、「子育ては一人ではできない」と同時に「親育ちも一人ではできない」と地域の人々に共有した活動に発展していきました。テーマも持って活動し続けるコミュニティづくりに新たな風を感じました。

3つ目の発表は、ご存知大阪市立大空小学校からの発表でした。前述したとおり、木村先生は急用にて欠席でしたが、ビデオレターとスカイプのLIVE中継で見事に会場の皆さんを魅了しました。全職員、地域の方々、保護者合わせ、「皆でつくる学校」と銘打ったぶれない理念は多くの児童や保護者の心をつかみ、「子どもも大人も学びあう学校」に成長していました。ちょうど数週間前にも大空小学校を題材にしたドキュメントがNHK教育テレビで放映された経緯もあり、会場の皆さんからは多くの質問が寄せられました。なぜ継続できるのか？校長が変わったらどうなるのかなど本音の質問に木村校長から丁寧にお答えしていただきました。最後に「学校は誰のためにあるのか」「教職員のための学校になっていないか」という自問自答には、関係者皆さんの強い意志を感じました。まさにこれが「みんなの学校」ということなのでしょう。木村校長は、学校が家庭教育に踏み込みことはないと言断していましたが、様々な学校活動通して各家庭・保護者がつながっている様子を見ると、「家庭教育の向上にこのようにするものよ！」という回答をいただいたように私には思えました。

「みんなで支え育てる家庭」というテーマに対して、今回の分科会は3人の事例発表を通して、手をつかむことができる確信みたいなものが私には見えました。保護者だけ、各家庭だけに閉じこもらず、多くの人と関わりつながりながら、多くのことを学び成長することが豊かな家庭教育を育てる手法の一だと思います。「つながりが創る豊かな家庭教育」そのものと実感しています。



学校と地域と家庭で、融合研の理念である WIN WIN の関係をもって、地域ぐるみの活動をし続けることがとても大切ではと、今回の分科会であらためて痛感した次第です。

【良かったこと】

3人の事例発表はエリア型（地区内）コミュニティで拠点を持った活動事例、テーマ型（子育て・親育ち）コミュニティでの活動事例、学校で発信し続ける事例発表と、各方面特徴ある支え育てる家庭の実践事例としてよかったと思えます。第2分科会を構成していただいた本フォーラム実行委員会に感謝です。

- ① さらにビデオレターやLIVE中継での事例発表は、発表者のご都合や移動時間、移動費用を考えると一つの手法であることが実証されました。もちろん生の声を聴くことが一番ですが・・・簡単な機材で可能になった現在にはこれも手立てだと思っています。

【反省すべきこと】

現地までの移動時間の関係で、事例発表者皆さんも到着がぎりぎり分科会発表者とは直前の打ち合わせはほとんどできませんでした。コーディネーターとしては、掘り下げて聞く機会もなく、ご迷惑をおかけしたのではと思っています。いい分科会にするためには、次回から少なくとも1時間前集合を義務付けることが必要かと思いました。

- ① 事例発表者の発表時間は〇〇分ですと伝えても、時間厳守はとても無理でした。私も逆の立場になれば同じですが・・・途中で切ってしまう技量と勇気ある強引さもなく、会場皆さんと協議する時間が短くなったことにコーディネーターとして反省しております。多少の強引さがないとコーディネーターは務まりませんね。初歩的なミス、反省！
- ② 分科会会場にマイクが1本しかなく、少し困りました。最低2本は必要ですし、会場が狭いからと言っても音響設備は必要だと思っています。

でもコーディネーターは楽しかったです。今まで私は事例発表側の立場ばかりでしたが、コーディネーターとしての引立て役の面白さも少しわかったような気がします。多少むずむずしますが・・・さらに、私が現在関与している進行中の家庭教育関連事業に関しても大きな収穫と認識を得ることが出来ました。本当にありがとうございました。

◇ 第3分科会「防災対策・安心して暮らせる地域づくり」
コーディネーター 野澤 令照 氏（宮城県仙台市・宮城教育大学）



東日本大震災から学んだことは、日頃の人と人とのつながりの大切さ、自然の非常さ現実の厳しさ、子どもたちの持っている力を、改めて見せつけられたことだった。そしてすべての人に生き方の問い直しを求めたことだった。

防災の根幹は、自分の命は自分で守ることであり、それを支えるのは、正しい判断と迷いのなく行動できる力である。そのために、教育と訓練が必要不可欠なのだ。

人と人とのつながりの土台は互いの信頼関係である。命を守るために取り組む防災だがそれを充実させていくことで、実は地域づくりにも大きく寄与することになる。

子どもたちを対象に行う防災教育でも、情報をもとにした正しい判断力、自ら行動する主体性そして、互いを思いやり助け合う力が養われる。ができる力を身につけさせることが肝要である。

岩手の事例からは、小さい子どもたちや母親にとって、保育所が最後の砦となったことを学んだ。自分では行動できない幼少期の子どもたちだからこそ周りの大人たちの行動が重要になる。月1回、必ず実施していた避難訓練が大いに役立ち、子どもたちが落ち着いていたことが救いになった。通信網の途絶、停電のために、暖房が使えず、給食もできなかった。その経験を生かし、現在、保育所にも食料や水を備蓄するなど、防災対策の充実を図っている。

枝幸町の事例からは、被害がなかった地域における次への備えの姿勢をつたえていただき、大いに参考になった。東日本大震災を防災教育を見直す良い機会になったと捉え、今後の取組に生かそうとしている。子どもの時から防災意識を育て、大人になっても忘れない教育が必要である。防災センターでの体験や避難訓練、さらには避難所体験など、様々な経験を積むことが、いざという時に生きて働く力となるはずである。マニュアルを整備することも必要だが、それにとらわれない柔軟性が大切である。保護者への引き渡しは当然のこととして行ってきたが、それが危険を伴う状況になったとき、どのような行動をするかが問われることである。大きな課題である。

和歌山県田辺市の事例からは、学社融合を推進してきた土壌のもとで取り組む防災教育の姿を見せていただいた。全国一と言われる市域の広さがあり、山も川も海もすべてそろった町として、積極的に防災教育に取り組んでいる。避難訓練も地域と協働で行うことが当然であり、町としての意識の高さを感じた。釜石の奇跡を学んだ子どもたちが、田辺の奇跡を起こそうと、進んで活動している姿が印象的である。自分の命は自分で守る、そしてふるさとに誇りをもって、他に誇れる地域づくりを進めているという報告があった。これからの発展、充実が楽しみである。

話し合いの中で、話題になったのが「釜石の奇跡」である。津波でんでんこと言われ、子どもたちが自ら避難した話は、周知の通りである。しかし、日頃は、相手の人のことを思いやる、大切にするという教育を受けている子どもたちが、周りの人のことを考えず、自分が助かろうと避難した姿には、違和感があった。あまり報道されていない事実を知り謎が解けたのである。それは、子どもたちも逃げるけど、家族も、知人も、みなそれぞれに逃げるから、決して心配して助けに戻らないという約束ができていたのである。その信頼感があったからこそ、できたことだったという話に、すんと腑に落ちた思いだった。

学校だけ、地域だけ、では、防災は効果がないのである。地域が、社会が、思いを共有して取り組む防災を実現できてこそ、一人でも多く助かることができるのである。

被災者の方たちの共通した思い、「自分たちの経験が生きて、次の災害のときに少しでも被害がすくなくなれば、そのときやっと心が軽くなる」という言葉を肝に銘じたい。

◇ 第4分科会「地域のスポーツ活動と健康的なコミュニティづくり」

コーディネーター 伊藤 恵造 氏（秋田大学教育文化学部スポーツ・健康教育研究室）

枝幸では大変お世話になりました。枝幸フォーラムに参加しての感想を書かせていただきます。

はじめに、分科会の進行についてです。率直にお詫びをしなければならないと思っています。進行の勝手から、予定していた参加者同士の意見交換の時間も確保できず、関係の皆様にご迷惑をおかけしてしまいました。申し訳ございませんでした。地元・枝幸町の井上諭一さん、美深町の前田研吾さん、そして嶋村清一さんのご発表（実践）の内容と、岸裕司さんのコメントに救っていただく形となりました。ありがとうございました。

分科会の内容は、非常に有意義なものであったと思います。スポーツ関連の学会・研究会では抜け落ちている議論が展開されていると感じたからです。スポーツ関係者のみの集まりでは、「総合型地域スポーツクラブ」の理念を大事にし過ぎて、この制度を「活用」（＝良い意味での「悪用」？）して生きていこうとする人たちの姿を議論の中心に据えることは少ないのです。「『健康』というキーワードが使えるのは、スポーツの強みだ」という、分科会の打ち合わせでの発言などは、まさにスポーツ関係者が議論すべきことではないかと思いました。

全体会（パネルディスカッション）では、パネラーを務めさせていただきました。後半部での「テーマ型／エリア型」に関する議論は分科会の内容との関わりから言っても大変興味深かったです。スポーツ（種目）という“テーマ”は、よりよい場所（施設）を求めて平気で“エリア”を超えていく人びとを生み出すと同時に、ある“エリア”に存在する物理的な場所（施設）が必要不可欠な活動でもあります。“エリア”としてのコミュニティがますます大事になってくる今後、こうした両面を併せ持つスポーツ（種目）をどう「活用」（＝良い意味での「悪用」？）していくことができるかがポイントだと思いました。

懇親会でも多くの収穫がありました。例えば、地元・枝幸町のような「小さな町」では、地域の力関係がそのまま地域づくりにも反映されるということを教えていただきました。これまで都市に暮らしてきた私にとっては、大変ショッキングなお話でしたが、一方で、そうした関係性は都市の中にも潜在していて、何かの拍子にそれが表出するものなのだろうとも感じました。その他、個人的には藤尾さんと宮本さんに今後の生き方に関する（叱咤）激励をいただいたことも心に残りました。

最後に、『北海道開拓おかし 枝幸帆立味』（北菓楼）のみならず、いくらや帆立の塩辛、ししゃもなど、枝幸にはその場でいただいてもお土産にしても、美味しいものがたくさんありました。なかでも、わが家での大ヒット商品は、『炊き込みごはんの素』（海洋食品）です。食べ物、ひと、そして実践。いずれもそれを味わった人を枝幸へと誘うものだと思います。この度は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



ロパネルディスカッション

テーマ「今、改めて問う。地域と学校の“かろやかな融合”とは？」

コーディネーター 融合研 副会長 岸 裕司 氏
 パネラー 第1分科会コーディネーター 油谷 雅次 氏
 第2分科会コーディネーター 青木 信二 氏
 第3分科会コーディネーター 野澤 令照 氏
 第4分科会コーディネーター 伊藤 恵造 氏



コーディネーター 岸氏



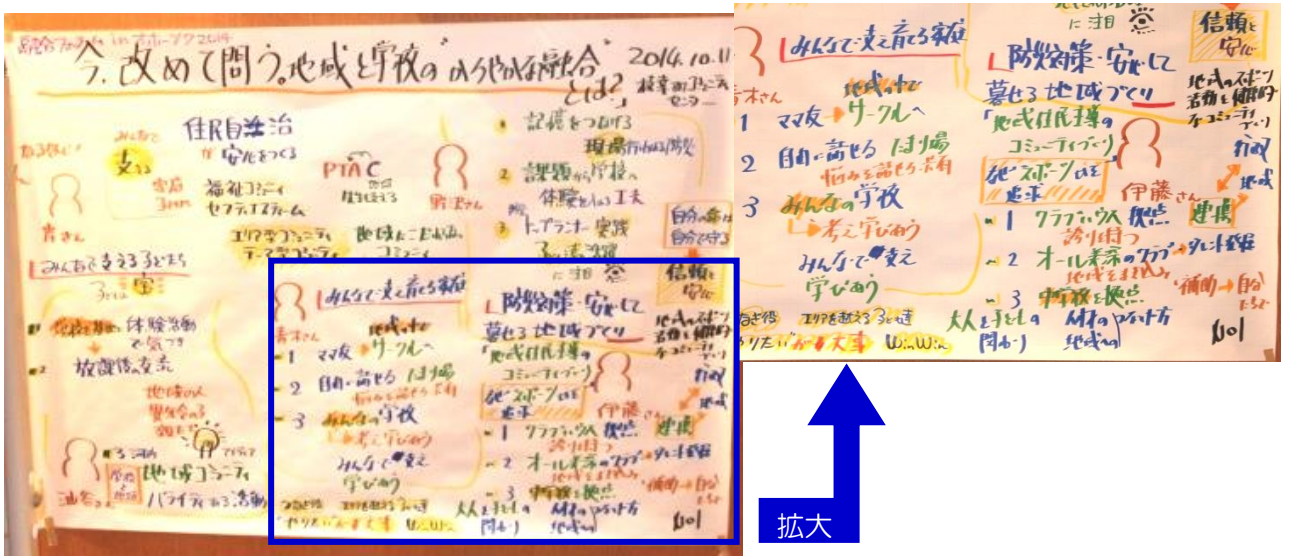
パネラー（左から油谷氏、青木氏、野澤氏、伊藤氏）



会場内の様子



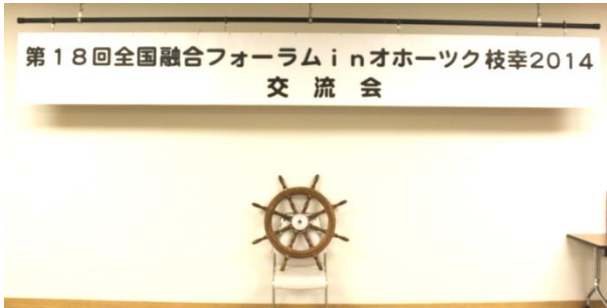
会場からの発言



パネルディスカッションまとめ

交流会

国際ソロプチミストオホーツク枝幸の会員の方々にご協力いただいて、枝幸の海の幸を中心に「北海道産食材」にこだわり、秋味鍋や毛ガニ、ズワイガニ、ホタテや鮭のお刺身、ししゃも、ふかしたてのじゃがいもなどの料理や飲み物をご用意しました。会場には、ソロプチミストの方の計らいで船の舵のほか、ガラス玉や魚網などの漁具が並べられ、海の街の雰囲気を演出していただきました。



枝幸産の海の幸



カニを食えると口数が少なくなります



枝幸産の鮭を使った秋味鍋は大好評！



恒例の競り市。枝幸産利尻昆布…大人気！



稚内市社会教育委員の皆さん



ご協力いただいたソロプチミストの皆さん

□小グループ意見交流

「学校と地域のかろやかな融合

～ワールドカフェdeほっぷ、すてっぷ、じゃんぷ!～

運営者 融合研 菊池 剛史 氏 藤尾 智子 氏



運営者 菊池 氏



会場内の様子



活動の様子①



活動の様子②



交流内容のまとめ



交流内容の発表

□記念講演

「今こそ、学校・家庭・地域の絆を深めよう！」

講師 文部科学省初等中等教育局 教科調査官・生徒指導調査官
 国立教育政策研究所 総括研究官・教育課程調査官 長田 徹 氏

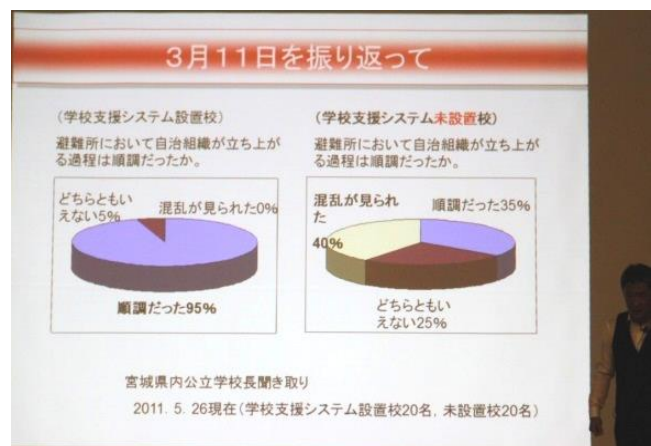
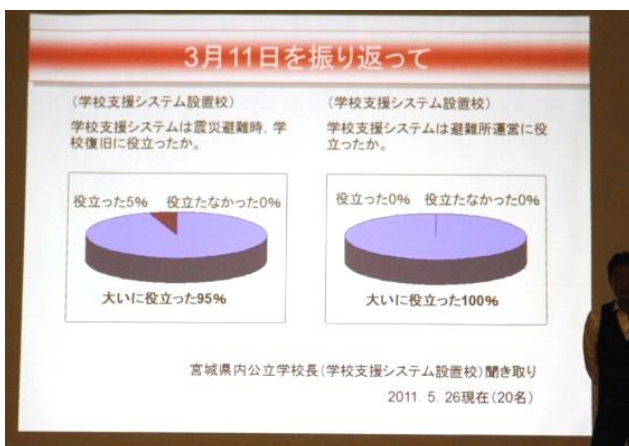


- ・ 2012年に実施されたOECD加盟国による国際習熟度調査（PISA）の結果では、OECD加盟の34カ国のうち日本は、数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシーの項目において世界でもトップクラスの得点を獲得している。
- ・ 将来の目標と学習成績に関する研究において、**低学年では夢や目標を持っている子どもは学習成績が良く、学年が上がると、夢や目標の実現のための意識が高い子どもが学習成績が良くなる傾向**にあるという調査の結果がある。

このことを踏まえて、低学年では大きな夢を与えられるように、高学年以上では将来や進路に関する具体的な知識・技能を習得できるような取り組みを行うことが必要である。教室内での学びが実社会に直結するような工夫が必要、ナナメの関係の大人との接点を持つことが重要であり、そのためには地域との協働が不可欠である。



- ・ 東日本大震災発生後、**地域が学校を支えるシステムが構築されている学校は、避難所の設営が早かった。**
- ・ 「学校と社会は一体、学校教育と社会教育も然り」



□閉会式

□全体講評

学校と地域の融合教育研究会

会長 宮崎 稔 氏



□次期開催地代表挨拶

琉球大学教育学部

教授 井上 講四 氏



□主催者あいさつ

学校と地域の融合教育研究会

副会長 野澤 令照 氏



2. 第18回全国融合フォーラム実行委員会

氏名	所属	役職	備考
1 開米 幸	枝幸町社会教育委員（副委員長）	実行委員長	
2 三上 信昭	枝幸町校長会 会長	副実行委員長	
3 井上 典子	枝幸町学校支援地域本部 推進アドバイザー	副実行委員長	
	特定非営利活動法人枝幸三笠山スポーツクラブ クラブマネージャー		
4 藤尾 俊郎	枝幸町社会教育委員		
5 徳保 喜幸	枝幸町社会教育委員（委員長）		
	枝幸町子ども会育成連絡協議会 会長		
6 開地 かほる	枝幸町社会教育委員		
	放課後子ども教室 うたのぼり放課後ふらっとたまり場 代表		
7 村山 純子	枝幸町社会教育委員（副委員長）		
	放課後子ども教室 遊YOU広場 代表		
8 村井 恒弘	枝幸町PTA連合会 会長		
9 甲斐 敬章	枝幸高校父母と教師の会 会長		
10 村山 修	枝幸地区民生員児童委員 主任児童委員		
11 大峰 みつ子	枝幸地区民生員児童委員 主任児童委員		
12 升田 裕見子	枝幸地域子育て支援センター 所長		
	枝幸保育所 所長		
13 三谷 浩明	枝幸町スポーツ推進委員 委員長	監事	
14 柳 辰哉	教育委員会事務局 教育次長	監事	

《事務局》

氏名	所属	役職	備考
1 井上 諭一	教育委員会事務局 参事	事務局長	
2 近藤 聡志	教育委員会事務局社会教育G主幹	事務局員	
3 遠藤 孝幸	教育委員会事務局学校教育G主幹	事務局員	
4 西浦 千景	教育委員会事務局社会教育G副主幹	事務局員	
5 齋藤 巧	教育委員会事務局社会教育G社会教育主事	事務局員	
6 祐川 はるか	教育委員会事務局社会教育G主事補	事務局員	

3. 実行委員会等の開催経過

全5回の会議を開催し、内容の検討を行いました。

会 議	開 催 日	協 議 事 項 等
第1回	平成26年2月14日	<p>協議事項 ・ フォーラム名称について ・ 実行委員会設置要綱について ・ 役員選出 ・ 内容について</p> <p>そ の 他 ・ 融合研 宮崎会長、宮崎事務局次長来町 ・ 融合研と融合フォーラムについて（宮崎会長） ・ 実行委員構成の見直しについて意見あり</p>
第2回	平成26年3月17日	<p>協議事項 ・ 役員選出 ・ 開催要項（案）およびタイムテーブルについて ・ 収支予算（案）について</p> <p>そ の 他 ・ 融合研 宮崎会長、佐々木事務局長来町 ・ 実行委員の増員（枝幸地区民生児童委員・主任児童委員2名、子育て支援センター所長）</p>
第3回	平成26年4月10日	<p>協議事項 ・ 開催要項（案）の検討について ・ 今後の推進スケジュールについて</p>
第4回	平成26年7月10日	<p>協議事項 ・ 業務分担表（案）について ・ 推進スケジュールについて</p>
第5回	平成26年9月16日	<p>報告事項 ・ 参加申し込み状況について 協議事項 ・ 業務分担表について</p>
その他	平成26年10月2日	<p>協議事項 ・ 交流会協力団体（ソロプチミストオホーツク枝幸）との 打ち合わせ</p> <p>出 席 者 ・ 開米実行委員長、徳保委員、大峰委員、村山(修)委員、 ソロプチミストオホーツク枝幸（永澤会長、種田事務局 長、天野さん）、教委（齋藤）</p>

4. 実行委員会等の意見・感想（ふりかえり）

- 当日参加できず泣きたい気持ちでいた。皆さんのお話を聞いたり、写真を見て、皆さんの力でよいフォーラムになったなとうれしく思っている。実行委員長になってほしいと話があったときに、なぜ自分にそんな役割があつたのと悩んだこともあった。融合研と意向もあるので地域の意向をどの程度まで出していいのか悩んだこともあった。

実行委員の皆さんの力添えでここまで来ることができた。これを機会に青少年育成ネットワークの方向性をどうしたらよいか悩んでいた。今回のフォーラムを通じて枝幸の力、地域の底力を感じた。何かをすることで地域のきずなが深まっていくと感じた。

地域の力はこれから必要となる。学校と融合といっても知己がしっかりしていなければならぬ。これからも枝幸町のため子どもたちのために力をあわせて頑張っていきたい。
- 今年の2月からスタートして、どのようになるのかなと自分自身心配していた。

事務局が奮闘され、実行委員長はじめ、私たち（副実行委員長）とも連携をとりながら情報交換をして大会を迎えることができた。他の研究大会もそうだが、大会を実施した者が力をつけるんだなということを感じた。

その理由として、1つには、皆さんの力合わせができる。さすがだなと思った。2つには、実行委員の中で役割はそれぞれあるが、その行動力を感じた。どちらかという融合研の主導で動いていくのかなと思っていたが、様々な立場で関わっている人が集まったことで枝幸町としての声もあげてきた。

なかでも M 実行委員の動きに注目していた。気づいて動く、人を動かす。そういった動きが勉強になった。

長田氏の講演は非常に素晴らしかった。参加しなかった教員に「聞いていない人、残念だったね」と自慢している。何かの機会でもたお話を聞く機会があればいいなと思う。

皆さん、ご苦労様でした。
- 融合研に育てられた。放課後子ども教室が何なのかわからずに活動していたが仙台で開催されたフォーラムに参加し、融合研の方と出会った。大変でつらい思いをしながら内容を考えているのに、融合研の方々は楽しそうに内容を考えていて、「なぜそんなに楽しそうにできるの？」と感じて、（融合研副会長）岸さんからいただいた本を読み、これまで学んできたことが次の方につないで行ったり、放課後子ども教室もスタッフも皆さんがいなくなり、ピンチになったがそれをチャンスに変えて次の世代に広まり、今のスタッフも次につなげていけるようにしている。つながっていくことが本物だと思う。今後も協力していきたい。
- 社会教育委員として様々な分科会に出てきたが、今回の小グループ意見交流が一番良かった。多すぎず少なすぎず会話が途絶えない。長田氏は肩書だけみると文科省職員だが、実践に基づいた中身の濃い話であった。枝幸で全国大会ができるとは思わなかった。（実行委員の）I 夫妻の尽力があつたことだと思いました。

融合研会員の岩手県紫波町の F さん、お名前は存じ上げていたが、お会いする機会がなかったが、今回お会いすることができた。これも枝幸で開催したことによると思います。
- 誰かがやるんだらうなと思いながら、さらっと行くんだらうと感じていた。

実行委員長から実行委員への切実な思いを受け、せっかくやる大会なので実のある大会にしたいと思った。

これからの地域に必要、足りなかったことを少しだけわかることができた貴重な経験をすることができた。皆さんの輪が広がって子どもたちがよい方向に成長していくように地域で支える一助になればよいと思います。

- 1日目のみの参加だったが、2日目の方がよかったという話を聞き、残念な思いでいる。
 青少年育成ネットワーク、枝幸の宝である地域の子どもたちを地域で育てなくてはならないという意識がある。
 そのような中で今回のフォーラムを枝幸で開催し、改めて町内でその機運を高めることができた。すそ野を広げなくてはならないなと思い、実行委員に加えて進めた。
 社会教育は「人づくり」といわれるが、社会教育委員が人づくりを1人でできるかというところではなく、自分のフィールドで自分が得た情報を何人かの人に広めることしかできないが、このフォーラムで融合研の会員の方々の熱いお思いを感じてくれたと思う。
 今回集まったメンバーが町内の1人、2人に伝えるだけでも、すそ野が広がる。
 自分の胸にしまわず、それぞれのフィールドで周りの人に話していただければ枝幸の子育て環境も変わってくると思う。
- 今後、社会教育主任児童委員は枝幸町内の子ども保護者すべてに関わっている立場。これからは関わらせていただくことがあると思う。良いことも悪いこともたくさんある。今後ともお願いしたい。
- 5月（教育委員会事務局）に着任した。事務引き継ぎの中で全国大会があると知った。行政職員として道北大会など様々な大会にかかわってきたが、全国と冠のつく大会は初めてで、すごいなと感じた。フォーラム開始前に元枝幸小校長と教育長室で、2人で話す機会があり、（自分の苗字の）ルーツがどこなのかをじっくり話した。通常でいけばイベント後に反省会があるが、今回のフォーラムでは反省することがほとんどない良いフォーラムであったなと思う。
 学校教育と社会教育の融合という点で学校教育関係者が少ないが今後、一層融合を進めていくためのよいキックオフの機会となったと感じている。
- 全国の方々の意見やいろいろな方に触れて刺激にも経験にもなった、子どもたちのために生かしていきたい。
- 全国大会という大きな場での発表にとっても緊張したが、とても勉強になった。
- かつて社会教育を担当していたことがある。当時は学校教育と社会教育はあったが「学社融合」というものは全くなく、別なものだった。30数年ぶりに教育行政に戻ってくると「学社融合」があったが、わからなかった。なおかつ、今年の秋に学社融合の全国大会があると聞き、長として出番が用意されるものと、しり込みしていた。
 学社融合に対する印象、フォーラムの実施の前後で違う。フォーラムの前は限定されたイメージを持っていたが、2日間を通して、非常にすそ野が広がったことが大きな収穫であった。
 参加した方の満足とスタッフのやり遂げたという満足下な顔が非常に印象的だった。参加した方が、ただ単に学社融合のフォーラムに来ただけでなく、様々なことを感じてくれたと実感している。非常に良い経験をさせていただいた。
- 「融合菌」に感染して10年。よい菌に感染したなと感じている。10年前の当時学校の教職員を交えて学校と地域がどうやって近づくかという研修会場面を設定していたが、そのたびに学校からは「また融合研かい」という話をされたことがある。今思えば、間違いではなかったと思う。融合研は理論と実践がよいバランスで行われている。理論なき実践は混乱を招き、実践なき理論は不毛だと考えている。そのバランスが大切なんだなと感じている。融合研の方々は、個性が強いところもあるがその分、何かあったあとは元気をもらったなという気になる。フォーラム開会式で宮崎会長が北海道でも枝幸町は融合教育が進んでいる地域だと言われたことを励みに今後も頑張っていきたい。
- 様々な地域の方々の話を聞くことができ、いろんな方との出会いがあった。勉強にもなったし、楽しい2日間をお手伝いさせていただき感謝します。またこのような機会があればお手伝いさせていただきたいと思えます。

- スポーツ推進委員として参加した。春に行われたスポーツ推進委員の会議の時からスポーツ推進委員長より「秋は頼むぞ」と言われていた。交流会で宮城県の方と話す機会があり、異なる地域の方と話をすることができてためになった。講演会でもニュースで見る以上のことを知ることができ、考えさせられた。スポーツ推進委員として何かの機会があればお手伝いしたい。
- 今年の2月から準備を進めてきた。地域力を強く感じた。ソロプチミストやネットワーク、それぞれの団体の力が際立ったフォーラムだったように感じる。それらを大事にしてこれからの社会教育を発展させていくことが社会教育行政の使命だと感じている。
- 全国大会が枝幸で行われるということで、皆さんと同じ気持ちで貴重な経験だった。融合という点で子どもの健全育成のためには地域の力家庭の力が大事だと感じている。今後とも引き続きご協力をいただきたい。
- 融合研とのつながりは、前回教育委員会にいた時に放課後子ども教室、学校支援地域本部があった。今年5月に戻ってきた時に融合フォーラムを枝幸で開催すると聞いたときに驚いた。「ここまでになったのか」という印象だった。学校支援地域本部、放課後子ども教室どちらを見ても当時は、手助けが必要だったが自主的な活動がなされている。融合研の方々のノリがすごく、ああして人を巻き込んでいっているんだな。人を楽しませることにたけていて、自分たちの思いに引き込んでいるんだなと感じた。学校と地域のきずなをもっと深めていけたらと思います。
- 5月に（教育委員会）に着任し、すでに融合フォーラムを行うことが決まっており、何なのかわからないなかで進んでいた。全国大会が枝幸町で行われることはすごいなと感じた。融合研の事務局長と話をした際に「私たちこんなところまで来て、何してるんだろう？って思うでしょ。？」と聞かれた。採用2年目というところで非常に貴重な体験をさせていただいた。

文部科学省「全国生涯学習ネットワークフォーラム」関連事業

第18回全国融合フォーラム in オホーツク枝幸2014（兼）枝幸町学社融合研修会 報告書

発行 平成26年12月28日

著者 ・第18回全国融合フォーラム in オホーツク枝幸2014実行委員会

住所：〒098-5807 北海道枝幸郡枝幸町本町916番地 枝幸町教育委員会内

TEL：0163-62-1364

・学校と地域の融合教育研究会

住所：〒285-0843 千葉県佐倉市中志津7-17-4 融合研

TEL/FAX：043-463-1929 <http://yu-go-ken.net/>

発行・編集 学校と地域の融合教育研究会 会長 宮崎 稔

※本書の全部または一部を無断で、複写、転載、引用することを禁じます。

子育て、マチづくり、防災…



学校と地域 絆深めて

【枝幸】学校と家庭、地域が連携し子育てやマチづくりに取り組む「学社融合」を考える「第18回全国融合フォーラム in 枝幸2014」が11日、町中央コミュニケーションセンターで開催した。全道、全国から約160人が参加。各地域の取り組みを発表し意見を交わした。

(太田一郎)

「学社融合」フォーラム 枝幸などの事例紹介

「学校と地域の融合教育 研究会」(本部・千葉県)が毎年、全国持ち回りで開いている。道内では初めて。この後、子育て、家庭、防災、地域スポーツをテーマにした各分科会で各地の事例が紹介された。枝幸からは、枝幸小の保護者らが子どもらに遊びの場を提供

初日の最後に行われたパネルディスカッション

したのは、道内で最も学社融合に地道に取り組んでいるため」と語った。

最終日の12日は、意見交換のほか午前10時半から文部科学省教科調査官の長田徹氏の講演「今こそ、学校・家庭・地域の絆を深めよう」がある。

している「遊YOU広場」や、町民のスポーツ活動を幅広く推進するNPO法人「枝幸三笠山スポーツクラブ」など四つの事例が発表された。

「今、改めて問う、地域と学校の「かろやかな融合」とは」と題したパネル討論では、「家庭が少人数化したことで母親や子どもら(地域ぐるみで)支えることが重要になった」「教職

北海道通信

昭和50年6月12日第3種郵便物認可
日刊 祝祭日、日曜日、土曜日 休刊

日刊教育版

平成26年 11月6日(木曜日) 第10367号
 発行所 札幌市中央区北5条西6丁目
 株式会社 北海道通信社
 〒(代) 222-3521 FAX 222-3532
 発行人 松木 慶喜

支社 東京 6261・3822 旭川 23267 函館 27781
 釧路 25241 帯広 27872 岩見沢 25044
 支局 室蘭 21735 網走 23719 小樽 20515
 稚内 27111 留萌 22716 浦河 22200
 根室 28028 江差 220957 倶知安 25013
 (購読料1ヵ月12,960円)

各地で「北海道教育の日」協賛事業 着実に拡大・浸透する取組の輪

地域・学校が融合し子育てを 稚内で全国融合フォーラム

沖縄などから100人参加



地域と学校の「かるやかな融合」を探った全国融合フォーラム

このフォーラムは、学校・家庭・地域が融合し、子どもの健全育成や学校支援を通じた地域づくりなどについて研修することが目的。

千葉県に本拠地を置く「学校と地域の融合教育研究会(宮崎検査長)が主催、枝幸町教委と共催で、道内はじめ岩手、大阪、千葉、和歌山、沖縄など全国各地から約百人が参加した。

課後子ども教室「遊YOU広場」の取組を紹介し、地域や立場が異なる参加者たちが、様々な意見を交わした。

最後は、文部科学省初等中等教育局教育課程課の長田徹教科調査官が「今後の学校・家庭・地域の絆を深めよう」と題して講演。長田調査官は、現在の日本の教育が抱える課題を克服していくためには「地域と学校の連携がまさに大切」と説き、学社融合の今後の在り方などに関して説明した。

地域と学校の融合を目指す第十八回全国融合フォーラムが、十月十一〜十二日、枝幸町中央コミュニティセンターを会場に、教育の日協賛事業として開催された。全国・全道から社会教育関係団体・スポーツ団体の指導者や学校関係者、行政含め約百人が参加。地域と学校が融合した子どもの健全育成の在り方について研鑽を積んだ。

二日間の全体テーマは、「今、改めて問う。地域と学校の「かるやかな融合」とは?」。本テーマをもとに、分科会やパネルディスカッション、意見交流を実施。第一分科会では、枝幸町の学校支援地域本部や放

学社融合で「親育ち」

学校と地域の融合教育研究会(宮崎校長)主催の「融合フォーラムinオホーツク枝幸2014」は10月11、12の両日、北海道枝幸町で、同町の研修会を兼ねて開かれた。大会テーマは「今、改めて問う。学校と地域の「か」やかな融合」とは。枝幸町や北海道の各学校や地域、全国各地の実践内容を発表するとともに、地域の特色を生かした「学社融合」が学校教育や家庭教育、防災などにもたらす意義などを考えた。

分科会は、四つのテーマで開催した。
第2分科会のテーマは「みんなで支え育てる家庭」。家庭が本来持っている社会機能や地域社会での自然な関わりが維持できなくなっている、現代社会の環境。個々の保護者や学校だけでなく、地域全体で家庭を育む環境、まちづくりの再構築について、個人、地域社会、学校、協働の視点から考えた。

融合フォーラムinオホーツク枝幸2014

「この河野和枝代表。」「うたのほり、みどり」と、たまの場は、10年前に発足。当時、子育てで困った中だった母親たちが中心となって運営し、活動を展開してきた。発足後、3年ほどは試行錯誤が続いた。それでも、月1回のスタッフの会議(幹事会を学校に工夫を凝らし、4年目には運営ルールが固まってきた。活動は、基本的に週2回(本年度からは週1回)。これまで、ポータル遊びやスケート、木工、サケの稚魚放流、スノーモービル、競馬観戦、出店など、地域の文化展への出展など、さまざまな内容を行ってきた。

枝幸町 母親軸に「放課後教室」運営

毎月の活動内容は、幹事会で決定。各会の責任者を決めて、細かい内容は一任する。会報の「ふらたまつしほ」は、スタッフが交代で発行する。会報の配布などを通じて学校とつながり、共に活動する団体とも交流を行うなど地域とのつながりも深い。スノーモービルなどでは、父親たちの出番もつづいた。学童保育とも連絡を取り合い、年に10回の合同事業を持っている。

子どもたちはもちろん、スタッフからも大変だけと楽しんでいる声が聞かれ、一緒に活動した高齢者からも「元気をもらいました」というお礼の言葉をよみ受ける。この活動に参加することで、自然と家庭教育の充実にもつながっている。

「このほり子育てネットワーク」は平成7年に発足。現在は、子育て体験交流のコーディネート

札幌市 子育ての悩み・思い語り合う



北海道枝幸町で、同町の研修会を兼ねて開かれた「融合フォーラムinオホーツク枝幸2014」の様子

子どもたちの発達(乳幼児・学童思春期・青年期)に合った学びの場の提供など、多彩な活動を行っている。今回はその中から、特に乳幼児を育てる母親たちが悩みなどを語り合い、課題を解決していく、子育て交流会・講演会「子育て」について紹介した。

この活動は「親育ち」を目的とする子育てネットワークを使った社会教育が推進されているカナダの事例を基に、子育て中の母親同士が日頃の子育ての悩みを語り合う中で、さまざまなことを学び、課題解決につながることを狙い、少人数グループで互いの話を聞き合う。「ピアカウンセリング技法」を用いて実施している。世帯には少し先輩の母親、調整役を同じ環境にある大空小学校の木村美子校長が、地域と連携した子どもたちのための学校づくりについて発表。それが、家庭教育支援につながることを示された。

学校・地域連携
定着する枝幸町

今回、会場となったのは北海道北部の枝幸町。漁業や酪農、林業が盛んなこの町では、「放課後子ども教室」や「学校支援地域本部」「総合型地域スポーツクラブ」の活動が定着し、学校と地域の連携が進んでいる。フォーラムでは、第2分科会の「うたのほり」と「たまの場」のスムーズな連携所運営に加え、第1分科会で町立枝幸小学校の「学校支

援地域本部」と「放課後子ども教室」、第3分科会で防災教育、第4分科会で総合型地域スポーツクラブの内容を報告した。このうち、校内の一室を拠点に活動する学校支援地域本部の事例発表では、学校と地域が良好な関係でさまざまな取り組みを統括するためのコーディネーターの役割を紹介した。

◇

この他、フォーラムでは、四つの分科会で行われた発表内容を基にして「地域と学校の『か』やかな融合」について考えるパネルディスカッション、ワールドカフェ形式による参加者同士の意見交換、文相省教科調査官・生徒指導調査官・国立教育政策研究所総括研究官・教育課程調査官の長田徹氏の講演が行われた。長田氏は講演で、仙台市での東日本大震災の経験から、学校と地域が普段からより良い関係を築いていくことが災害時のスムーズな避難所運営などににつながることを強調

「収穫」などの肯定的な声が多く寄せられている。事業に参加した母親たちが新しいスタッフとなり、自らの経験を基に企画を工夫する姿も見られる。自分たちが学ばなければ、子育て支援活動にも参加する社会教育の好循環が生まれた。

また、インターネットによる中継で、大阪市立大空小学校の木村美子校長が、地域と連携した子どもたちのための学校づくりについて発表。それが、家庭教育支援につながることを示された。

